

第2回 川田雄基 プリティッシュヒルズ名誉館長  
本物の英国があることに誇りを持つ

本物の英国文化を体現させるために



「国内にパスポートのいらない外国を創りたい」

昭和38（1963）年に外国語学校を創立した佐野公一初代理事長は、学生たちの学習効果を高めるために、バスでも行ける国内に外国と同じ環境を創ることを着想しました。その想いを結実させたのが、平成6（1994）年7月に開館した「プリティッシュヒルズ」です。開館の前年、世代を超えて英国との数奇な縁を持ち、英国文化への深い造詣を持つ川田雄基氏がプリティッシュヒルズに参画しました。プリティッシュヒルズの「文化の語り部」としての人生を全うする覚悟をお持ちの川田名誉館長に、日本で初めての英国文化を体験できる国際研修施設がいかにしてスタートしたかをお聞きしました。

佐野隆治会長に初めてお会いしたのは平成5（1993）年のことでした。私は三菱商事に勤めていたのですが、ある部署から、「神田外語学院の理事長が英国に詳しい人を探しているんだが、会ってくれないか」と相談を持ちかけられました。まあ、軽い気持ちで参上しましたよ。

事務所にお伺いしてみると、驚きましたね。すごい設計図と模型があった。プリティッシュヒルズの設計図です。何でも、本物の英国の村を作るということでした。ただ実のところ内心では、それを見せられたとき、「こんなものが日本にできるわけないだろう」と思ってしまいました。すると会長はすかさず、「川田さん、現場を見てくれませんか」と言われた。きっと、心の内を見破られていたのでしょうね。





それから2、3カ月後のことです。ふたたび佐野会長から連絡をいただきました。会長は、「案内を付けるから現場を見てくれないか」と言われました。福島の実地に着いて、ヘルメットを被って、工事現場に入った。驚きましたよ。まだ、マナーハウスは骨格しか出来ていなかったけど、礎石の積み方を見ただけでこれは本物だと判かった。裏に回っても、どこにも手抜きがない。360度、死角がない。これは大変なものだと思いました。

その場で私は思った。これだけの建物があるのなら、英国の景観もなければダメだと。当時、私は三菱商事の名刺しか持っていないのに、現場の作業員に「その石は捨てるな、こっちに持ってこい！」って、わめき出していた。

私は英国のムーアをイメージしていたのです。ムーアっていうのは荒野（あれの）のこと。シェイクスピアのリア王が精神異常をきたして彷徨う荒地です。現場で掘り起こされていた大きな石は、きっとそんなイメージを喚起する舞台装置になると直感的に思った。マクベスの3人と魔女が出会う場面でも使える。とにかく、その時からワーワーと騒ぎ始めたわけですよ。

東京に戻り、佐野会長にふたたびお会いしました。「とにかく、こんな面白い仕事はないから、ぜひご用命ください」と言いました。三菱商事の名刺しか持ってなかったのに、現場で石をめぐる騒いできたことを熱く語ると、会長がニヤッと笑われた。こんな風にミイラとりがミイラになったわけです。私は三菱商事をすっぱりと辞め、背水の陣でプリティッシュヒルズの立ち上げに参加することを決めました。



思い返せば、会長にお会いしたのも、福島の実地に行ったのも、よく都合が合ったなと思います。私は、学生の頃に、ケンブリッジ出身の家庭教師に英語を学んで以来、大変なアングロファイル（英国びいき）になりました。その後、商事会社で海外を飛び回りながらも、英国に駐在する機会はありませんでしたが、58歳にして、大好きな英国の文化に関わる仕事ができる機会を得た訳です。それはきっと、天国にいる私の祖父や伯父がうまく操ってくれたのだと思いましたね。（1/7）



第2回 川田雄基 プリティッシュヒルズ名誉館長  
本物の英国があることに誇りを持つ

本物の英国文化を体現させるために



**英国に青春をつぎこんだ祖父と伯父。  
ふたりの意思が働き、私の人生が決定された。**

私と英国のかかわりを説明するには、時計を幕末まで戻さなければなりません。川田家はもともと土佐藩の「郷士」でした。土佐藩には武士に「上士」「郷士」という身分制度があり、郷士は下級武士で暮らしもひどく貧しかった。この土佐の郷士階級から、土佐勤王党の武市半平太や坂本龍馬など、幕末の動乱期の中心人物が現れます。

彼らと同時代を生きた私の曾祖父、川田小一郎には経営の才覚があり、幕末期には藩財政の管理などで手腕を発揮しました。同じく土佐の郷士で、ビジネスに長けていたのが岩崎弥太郎です。明治維新後、小一郎は岩崎弥太郎をリーダーとする九十九商会（後の三菱商会）に幹部として参画し、船舶事業などで三菱財閥の礎を築いていきました。

川田小一郎の長男が私の祖父・川田龍吉です。龍吉は、岩崎弥太郎がアメリカ人教師・ヘースを招いて大阪の土佐藩蔵屋敷に開いた英語塾で4年間にわたり英語を学び、後に英国のスコットランド、グラスゴーへ留学しました。川田小一郎は、三菱の発展には造船技術の専門家を育成することが不可欠と考え、息子の龍吉に留学することを命じたのです。グラスゴーは当時、世界の造船の中心でした。







こうして、龍吉は7年間に及ぶ英国留学に出発するのです。明治10（1877）年、龍吉が21歳のときです。龍吉は、ヴィクトリア朝のピーク期のスコットランドで、先端の造船工学を学ぶ一方で、現地の英国人女性と恋に落ちます。帰国後に父・小一郎に結婚を懇願しますが、認められず、2人の恋は成就しませんでした。

余談ですが、龍吉は帰国後に横浜ドックなどを手がけた後、函館ドックの再建を任されて北海道へ移住します。農民たちの貧困を目の当たりにした龍吉は、欧米からアイリッシュ・コブラーという品種のジャガイモの種イモを輸入し、自らの農園で栽培し、地域の農家への普及を図っていきました。龍吉は、早世した父・小一郎が持っていた男爵の爵位を継承していましたから、このジャガイモは、「男爵イモ」と呼ばれるようになったのです（※1）。

もうひとり、英国と縁が深いのが私の伯父。川田家の跡を継ぐ優秀な人物として、オックスフォード大学に留学しました。しかし、当時の英国はヴィクトリア朝の終わりの時期。ロンドンではスモッグがひどく、肺結核を患ってしまった。帰国後は祖父・龍吉と一緒に北海道で農場経営していましたが、29歳で亡くなったのです。



ともに英国で青春時代を過ごし、かたや英国女性と結ばれなかった祖父、そして無念の死を遂げた伯父。どうもこのふたりの意思が働いていて、ブリティッシュヒルズで働くようになる私の人生が決定されたとは思えません。ブリティッシュヒルズには、ふたりが青春をつぎこんだ英国の雰囲気がありますからね。

不思議なことがひとつありましてね。三菱商事時代に、出張でロンドンに行った時のことです。仕事の合間にウィンザー城に行ったのだけど、案内されなくてもトイレの場所が分かってしまった。一緒に行った現地の駐在員が驚いたけれど、自分でもどうしてかは分からない。きっと、祖父や伯父が上から見ていて、教えてくれたのでしょう。（2/7）

1. 川田龍吉の人生については、『サムライに恋した英国娘 男爵いも、川田龍吉への恋文』【藤原書店、平成17年（2005）年】に詳しい。



第2回 川田雄基 プリティッシュヒルズ名誉館長  
本物の英国があることに誇りを持つ

本物の英国文化を体現させるために



神田外語の学生でもポロシャツなんかで来ると、  
「着替えるまで食べさせないぞ」と追い返された。

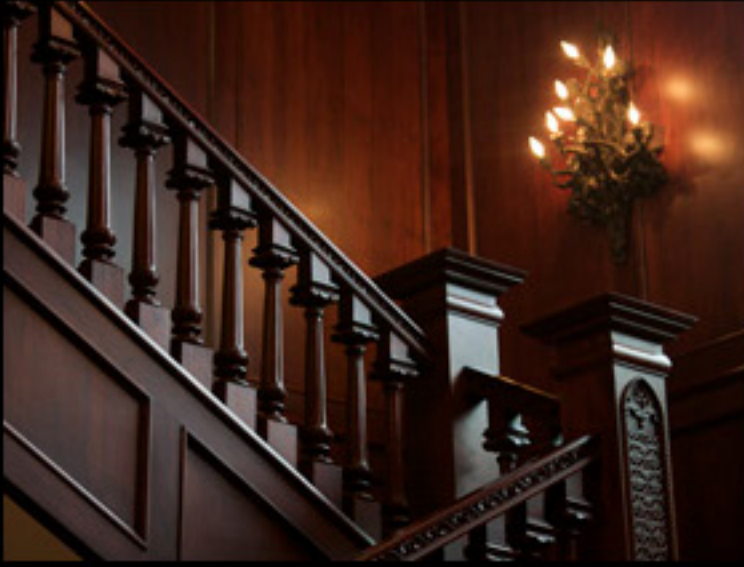
では、プリティッシュヒルズの草創期のお話をしましょう。

プリティッシュヒルズの中心的な建物は、マナーハウスです。マナーハウスとは、英国の荘園領主の屋敷です。だから、一般のホテルとは違う。マナーハウスには主人と奥方がいて、客人が来ると、"Welcome to my manor house."と出迎え、客は"Yes, Sir."と答える。そういう格式がある場所なんです。マナーハウスの主人である佐野会長は、神田外語グループを束ねる総裁だから東京にいなぎやならない。私の役目は、留守の城を預かる「城代家老」だと決めました。

とにかく本物の英国を再現する。パスポートもビザもいらなくて、飛行機に乗らなくて汽車に乗って来られる英国。寸分違わない英国にするには、まやかしではダメです。擬似の擬似研修では何の意味もない。せっかく、材木から家具にいたるまで英国から運んで建物を造ったのだから、それにふさわしいソフトが必要です。私自身、これだけの場所を預かるのなら、本物の英国にしなぎやいけないと思いましたね。







マナーハウスとしてあるべきサービスを実現するために、英国のバトラー（執事）を採用しました。ピーター・スタンプリーという人物です。英国には執事養成学校があって、彼はそこで学んだ。養成学校を卒業したバトラーたちは、紳士のなかの紳士。彼らはバトラーの資格を得ると、中東の富豪に雇われたり、イタリアのトスカーナ地方に残る本物のマナーハウスのバトラーになっていく。バトラーは、立場は使用人であっても、軍隊で言う士官と同じ立場だから、マナーハウスの主人でも「ミスター・スタンプリー」と敬称を付けて呼ばなくちゃいけない。

バトラーの下には、アンダーバトラーやヘッドウェイターといった部下たちがいて、リフレクトリーの配膳などを仕切っていく。皿1枚並べるのにも、プレスマットを使って正確に位置を決めていく。宴会ひとつにしても、純英国風のプロトコル（儀礼）に乗っ取ってやっていた。その皿にしても、学生たちが使うのはロイヤルドルトン。日本ではずいぶん高価な皿ですよ。階上のVIP用フロアではミントンを使う。皇室の方が見えても困らないようなクラスの皿です。



そもそも、リフレクトリーというのは、英国のパブリックスクール（寄宿学校）の集会場のこと。学生たちが集まって、お祈りをしたり、学長が訓示を述べたりする場所です。本来であれば、燕尾服に白の蝶ネクタイを結んで集まる。だから、ドレスコードだけはきちっとやろうということになった。神田外語の学生であっても、ポロシャツなんかで来ると、バトラーに「着替えてこい、着替えるまで食べさせないぞ」と追い返された。

学生が全員集まると、パブリックスクールの伝統にのっとり、バトラーが聖書の一節を読む。教師たちが入ってくると、英語で「起立、礼、着席」とやる。今の学生はこんなことやって逃げちゃうんじゃないかと思ったけど、「レトロで面白い！」って好評でしたね。最初の頃は、「リフレクトリーとは、英国のパブリックスクールの集会場で……」と説明していましたが、映画『ハリー・ポッター』が公開されてからは、説明の必要がなくなった。あれこそ、パブリックスクールの典型ですからね。（3/7）



第2回 川田雄基 プリティッシュヒルズ名誉館長  
本物の英国があることに誇りを持つ

「本物の英国文化を体現させるために」



**かつてない、他とは違うものを日本に定着させようと佐野会長も、私も、スタッフたちも一生懸命でした。**

バトラーのミスター・スタンプリーとは色々な演出をしましたよ。例えば、霞会館の方々が見えたときのことです。霞会館は昔の華族会館なので、メンバーはみな、辿っていけば祖先は殿様クラス。だから、バトラーには「英国の貴族社会で使っている言葉をそのまま話してほしい」と伝えた。バトラーは、彼らに "Yes, my Lord." (ご主君、かしこまりました) って言うもんだから、みんなご機嫌でした。ミスター・スタンプリーは、芝居っ気のある人物でしたね。

プリティッシュヒルズがオープンした頃は、学生は神田外語の学生ぐらいだった。だから、鹿鳴館じゃないけど、大人の社交場を目指して中身を作っていた。お客様は正装して来たものですよ。英国大使館のみならず、スロベニア大使のご一家もいらした。ロスチャイルドのお嬢さんがリサイタルをやったこともある。英国大使館のお墨付きの歌手でね。冬の日だったけれど、女性はミンクのコートにドレス、男性はタキシードでやって来た。バトラーが嬉しそうに、「ミスター・川田、マナーハウスはこうでなきゃいけませんよ」と言っていたのを覚えていますね。





当時のサービススタッフは、ワーキングホリデーで来日している英国や英連邦の若者たちが中心でした。ワーキングホリデーは働きながら学ぶことが基本だから、私は彼らに日本語を教えて、日光や会津にも連れて行ってレクチャーをした。会津には「日新館」という藩校があります。ここでは孔子の『四書五経』を教えていた。つまり、日本における異文化研究や異言語研究の第一歩を踏み出した場所だった。私が「ここは250年前のブリティッシュヒルズだよ」と説明すると、外国人スタッフたちは納得してくれましたね。

私は彼らに日本の封建制度について教え、日本の城と西洋のキャッスルの違いを教えたりした。長くいる英国教師は、そんな話をまとめて外国人スタッフ用の教材を作っていた。私はとにかく、彼らに日本がどういう国かを教えたかったのです。

先ほど、お皿の話をしました。料理も相当なものだった。佐野会長の理念に、フランスの料理学校、ル・コルドン・ブルーが賛同して、3年間ほど料理人を派遣してくれた。英国だからといって、英国料理ではない。 Buckingham Palaceでも、晩餐会はフランス料理。ロンドンのテムズ川沿いにある有名なレストラン、ガブロッッシュもフランス料理。イギリス人が片言のフランス語を話してサービスをしている。こちらがフランス語で質問すると、ウェイターは「これ以上は話せません」って、困ってしまう。まあ、それはともかくとしても、マナーハウスであるブリティッシュヒルズには、ル・コルドン・ブルーのようにトップクラスのフランス料理がふさわしかった。



部屋のクロゼットにあるマントは佐野会長の発案でした。 「18世紀には雨傘なんてなかったよ」って言われて、まったくその通りだと思った。客室棟とマナーハウスやリフェクトリーを行き来するのに、マントを羽織って歩いてくる。これも、『ハリー・ポッター』の映画が出来るまでは理解してもらうのに苦労したものです。

日本に、かつてない他とは違うものを定着させようと、佐野会長も、私も、そしてスタッフたちも一生懸命でした。そのこだわりがナンセンスだと言われたらそれまでだし、当時は経営が厳しかったら、そろばん本位で「意味のないことだ」と言われていたかもしれない。でも、本物の英国文化を体験させたい、という思い入れがなくなってしまうと、観光ホテルと変わらなくなってしまう。それだけは、絶対にしてはいけない、という思いが私にはありました。(4/7)



第2回 川田雄基 プリティッシュヒルズ名誉館長  
本物の英国があることに誇りを持つ

本物の英国文化を体現させるために



医師は天を仰いで、「そうなんです！」と答えた。  
私は絵師の感性のすさまじさに衝撃を受けました。

ポトレイトギャラリーの成り立ちについてもお話をしましょう。

マナーハウスでは、代々受け継いできた主や家族の肖像画を飾るものです。有名なのは、スコットランドのホーールド宮殿。スコットランドの王様のスチュワート王家ですね。宮殿の回廊には、老いも若きも、美しい人から醜い人まで色んな顔が並んでいる。

プリティッシュヒルズでも、本来であれば館の主人である佐野会長のご親族の肖像画が並んでなければならない。それを会長にお話すると、「よせやい！」と一蹴されました。そこで提案したのは、幕末、明治維新、文明開化の頃に、日本に寄与した英国人を並べることでした。建物の構造上、9枚がちょうどよかったので、9人の英国人を選び、佐野会長からもご快諾をいただきました。

明治が終わるまでに、2000人くらいのお雇い外国人が来たそうです。その大半が英国人で、7割くらいがスコットランド人。フランス人もいたし、ドイツ人もいたけれど、抜きん出て日本に功績を残したのは英国人だった。若い世代の英国人たちは、維新後の若い国である日本を自分たちの責任で西欧につなげようとがんばった。彼らには志があった。あとで驚いたのは、選んだ9人の英国人全員が私の曾祖父や祖父の知り合いだったこと。トーマス・グラバーに至っては、私の曾祖父が三菱に引き入れた人物です。因縁というか、因果のようなものを感じましたね。







描くべき人物は決まった。じゃあ、画家をどうしようかと思い、英国人の先生方と相談して、ロンドンタイムズに広告を出しました。そうすると、当時、23、24歳のジェシカ・ブラウンという女流画家が応募してきた。彼女を気に入ったのは、彼女の手紙に「私はアーティスト（artist）ではなく、アルティザン（artisan）です」とあったこと。「絵師」とでも言うのかな。画家でも、芸術家でもなく、絵の職人だという。お客様のお望みで、画材から画風まで、すべて合わせて変えますと言ってきた。

「これだ、彼女をつかまえる！」って指示しましたね。1枚1枚、画風が変わってもいけないし、芸術家気取りの画家に任せて「これが私の芸術です！」なんてやられても困る。来日した彼女には「ポートレートギャラリーは、すべてヴィクトリア時代の感じで統一してほしい」と伝えました。こうして、ブリティッシュヒルズでの絵画制作が始まりました。

ミス・ブラウンは、とても研究熱心な女性でした。例えば、アーモリー・ルームに、ウォーターローのスコットランド近衛騎兵の士官の肖像があります。彼女は英国の陸軍省や陸軍博物館にまで行って、当時の制服の有り様を調べてくるとともに、現地の専門家にも相談して、絵を描く準備をしていました。時代考証という点でもいい加減な仕事はしませんでしたね。

客室棟のラウンジの絵も彼女の作品です。7号棟のターナー棟では、どう見てもターナーの作品だという海の絵を描いた。沖合にだけ太陽の光が射っていて、遠景には英国の堂々たる軍艦がいる。どう見ても、ターナーの絵にしか見えない。4号棟のラウンジには、ハンプトンコートにあるようなヘンリー8世の家族のポートレートを描いている。本当に、多芸多彩な女性でしたよ。

彼女の画力を痛感したのは、昭和天皇の肖像画です。昭和46（1971）年にバッキンガム宮殿に行幸されたときの集合写真と昭和50（1975）年の赤坂離宮にエリザベス2世がいらっしゃったときのスナップショットから描き起こした2枚の絵があります。この2枚を比べてみると、75年の昭和天皇のほうが御背中が曲がり、明らかに病気を発症されておられることが分かる。

後に、宮内庁で天皇や皇族の診療にあたる侍医局のドクターがここに来られたことがありました。そこで私は、「この絵は何も知らない画家が写真をもとに描いたものです。昭和天皇は1975年当時から発症されておられたのですか」と聞くと彼は天を仰いで、「そうなんです！」と答えられました。その時、私はジェシカ・ブラウンという絵師の感性のすさまじさに、改めて衝撃を受けました。（5/7）



第2回 川田雄基 プリティッシュヒルズ名誉館長  
本物の英国があることに誇りを持つ

「本物の英国文化を体現させるために」



**考古学者たちはなぜ福島県から  
英国そのものが出てきたのか不思議に思うだろう。**

英国大使館とのお付き合いにも力を入れてきました。会議室には歴代の英国大使の写真を飾り、「アンバサダーズ・ホール」としました。実際の英国大使館では、歴代の大使の写真は、小さな写真が事務室と大使室の間の裏階段の壁に飾られているだけです。だから、ここを訪れる大使の方々には、「大使館よりも、プリティッシュヒルズのほうが、ずっと居心地がいいですよ」とお伝えしています。

これだけ英国の文化を理解する活動をしているので、英国大使館とも何か一緒にできないかということになり、ゴルフのコンペティションを開くことになりました。こちらですべて準備を整えて、英国大使館にお願いをして、「ザ・プリティッシュ・アンバサダーズ・カップ」が実現しました。それとは別に、英国市場協議会にも協力してもらってゴルフコンペを行った。英国と日本の交易を盛んにすることを目的とした団体です。そうやって、英国大使夫妻が年に2度、プリティッシュヒルズに来られるようになったのです。レセプションで、大使が"Thank you very much for coming."なんて挨拶すると、プリティッシュヒルズは、一瞬にして英国領のようになってしまいましたね。







思い出深い人物は、ブリティッシュヒルズのオープン当時に英国大使をされていたジョン・ポイド卿です。最近では英国大使と言えども、ゴルフをやらぬ方もある。ポイド卿も、もともと学者で、ゴルフはなさない。それでも、アンバサダーズ・カップでは、最初のオーナーショットだけは、ばっちり飛ばして、みんながうやうやしく拍手をする。お辞儀をして、引き上げてきたところに、私がジープで待っていて、彼を連れ出した。ポイド卿はリバーフィッシングが大好きだから、川に釣りに行っちゃったわけです。

でも、まったく釣れなかった。前日の台風で、川の魚たちはみんな沈んで川面に出てこない。しょうがないから、近くの料理屋に行って、板前さんに頼んで川魚を出してもらった。炉端に串の魚を並べてね。ポイド卿は、「お前、気が利くな」と喜んでらっしゃった。食事をして、そろそろ帰ろうとしたとき、ポイド卿は、「今度私が来るまでに魚たちに英語を覚えておいてくれないか。私が『出てこい!』と英語で言ったら、みんな出てくるようにね」とジョークをおっしゃった。知的で、ユーモアのある方でしたね。



ポイド卿は大使を辞めて外交畑を退かれてからは、大学のカレッジマスターになり、大英博物館の理事長に就任された。そのポイド卿との思い出で、もうひとつ印象的だったのは、ブリティッシュヒルズのオープン直後の視察にいらっしゃったときの言葉です。

「もし、この施設が大地震で埋まった後、3世紀も経ってから発掘されたら、考古学者たちはなぜ福島県から英国そのものが出てきたのか不思議に思うだろう」

実に学者らしいジョークです。今だに忘れられませんね。

ブリティッシュヒルズは、とにかく凝りに凝ってつくった。ケルトの十字架まで、野仏のように雑木林の中にさりげなく置いた。そんなこだわりの積み重ねが認められたことは嬉しかったですね。(6/7)



第2回 川田雄基 プリティッシュヒルズ名誉館長  
本物の英国があることに誇りを持つ

本物の英国文化を体現させるために



**ブリティッシュヒルズには本物がある。  
それは英国人にだって誇りを持って言える。**

一流のマナーハウスには条件がひとつあります。それは、お化けが出ること。お化けの出ないマナーハウスなんて、一流ではない。

ハンプトンコートでお化けが出るという有名な話がある。英国のヘンリー8世のときの王宮ですよね。ヘンリー8世が彼の部下の枢機卿から強奪した館です。そこにお化けが出るという有名な伝承があったのだけど、その姿をBBCのカメラが捉えた。お化けが出るという場所でカメラを回していたら、庭に面した扉が開いた。ヘンリー8世と思しき人物が出てきて、天井を見て、雨だなんて顔をしてまた扉を閉める。日本のテレビでそれが放映されると、ハンプトンコートを訪れる日本の観光客は「あの廊下はどこですか？」と必ず聞くようになったそうです。

私はブリティッシュヒルズの最初のお化けになる。場所も決めている。プールから上へ上がっていく2階の裏階段のところ。お化けが出るには理想的な場所です。雨が降った日なんてうってつけですよ。昔、その階段の踊り場に椅子が置いてあったのだけど、ふと気がつくと、その椅子に私が座っている。佐野会長にそのことをお話ししたら、「いいねそれ、ぜひやってくださいよ」と言われた。「やってくれ」と言われても死ななきゃできませんからね(笑)。





私は初代理事長の「言葉は世界をつなぐ平和の礎」という標語が大好きです。あれこそ、20世紀が生んだ最大の標語だと思いますよ。きちんと言葉が使えて、通じ合えれば、争いなんて起きない。私は英国の文化に興味があったから、世界中どこへ行っても、いろんなことに関心が湧いた。フィリピンやマレーシアも大好きな国ですよ。私は生まれながらにしての野次馬だと思っている。異文化、異言語に対する興味関心は、衰えたことはない。野次馬根性がなければ何もマスターできない。私は、その野次馬根性を原動力に生きてきた訳です。



そんな私がブリティッシュヒルズの仕事に関われたのは、本当に素晴らしい巡り合わせでした。言うならば、いい監督に拾われた野球選手のようなもの。それが一番近い表現かもしれない。「ああ、よくぞ、このチームで野球ができた」と思っている。いろんなチームに行く可能性はあるけど、つまらなければ意味がない。ここでは、本当にのめり込むことができました。

ブリティッシュヒルズには本物があります。本物がある、ということを我々は誇りにしなければならぬ。英国人に対してだって、「どうだ、お前のところの本物よりも本物らしいだろう！」ってことは胸をはって言える。だから、私はここにある文化の語り部でありたい。ブリティッシュヒルズに込められている意味を、私が知っていることを、若い世代にもっともっと伝えていかなくちゃならない。言葉にすれば、それを拾って生かしてくれる人もいるでしょう。それが私の励みにもなりますからね。

とにかく、生きているうちはがんばります。佐野会長とお約束したので、死んでも、お化けになって、ブリティッシュヒルズを見守っていきたくいですね。お化けになった私に、みなさんが会いに来てくだされば嬉しいですね。(7/7)



#### 川田 雄基 (かわだ ゆうき)

昭和11 (1936) 年、東京に生まれる。学習院高等科時代には、先輩である三島由紀夫にインタビューした経験を持つ。学習院大学政経学部卒業後、三菱商事に入社。フィリピン、シンガポール、マレーシア、ニューヨーク、中南米、英国などへの長期出張を歴任。平成5 (1993) 年、三菱商事を退社し、ブリティッシュヒルズの館長に就任。その後、(株)ブリティッシュヒルズ取締役を経て、名誉館長に就任。平成23 (2011) 年3月11日の東日本大震災の後も自らのネットワークを生かしてツアーを企画し、ブリティッシュヒルズを伝えるために精力的な活動を展開し続けた。平成24 (2012) 年3月永眠。享年76歳。